

Ⅲ 遺 物

1 土 器

調査区全域から、整理箱99箱分の土器が出土した。なかでも調査区南東の2カ所の土壇、SK5769と5770からは完形土器を含む奈良時代の多量の土器が出土した。この他散在する土壇や井戸からも、まとまった土器の出土が見られる。調査区中央東寄りに堆積する暗灰褐砂質土からは奈良時代の土器にまじって古墳時代の須恵器がまとまって出土した。

主要な遺構の出土土器を井戸出土土器、土壇出土土器、墨書土器、硯、施釉陶器他、古墳時代土器の順に記述する。

土器の器名・製作手法の分類と呼称については、既刊の『平城宮発掘調査報告』に従うこととする。Ⅰ群土器・Ⅱ群土器の群分けについては、土師器では判別のつくものについては極力これを記載することとし、須恵器では、多くがⅠ群土器であるためⅠ群土器以外について特記することとした。

井戸出土土器 (fig. 12・13)

SE5764 調査区北端の円形縦板組井戸。遺物の出土は少なく、土師器杯Aと須恵器壺M各1点が出土した。土師器杯A(2)内外面の磨滅が著しく、調整手法は不明、口縁部内面側がわずかに丸く肥厚する。須恵器壺M(1)、砂粒を多く含む胎土で、作りが雑である。

SE5765 井戸枠の抜き取り途中で、崩壊しそのままとなった井戸。遺物について井戸枠の内か外かの判別はできなかった。

土師器皿A(3)は、底部から口縁部にかけてをへら削りするc0手法。須恵器杯B・同蓋(5・6)6外面には火襷がある。皿C(4)底部外面を粗くへら削りする。火襷が見られ焼けひずむ。土師器壺B(7・8)7は精選された胎土で、底部にかけて器壁がうすくなる。8は器壁が厚く、粘土紐のつぎ目を残す。土師器壺A(9)内面を縦方向にいてねいにへら削りし、外面は縦方向のハケ目調整とする。9は、ススの付着が認められるとともに、熱を受け、赤褐色を呈する部分がある。この他に、放射1段暗文のある土師器杯A口縁部破片がある。

SE5767 SE5765の西側で検出した井戸、縦板1枚だけをかろうじて残し、井戸枠はすべて抜き取られる。遺物は掘形か抜き取りかの判別不可能。

土師器皿A(10)は口縁部をヨコナデ、底部外面を不調整とするa0手法。ラセン暗文+放射暗文をもつ、Ⅰ群土器。須恵器杯B(12-14)12・14は砂粒を多く含む胎土で、14は焼成が甘く、灰褐色を呈する。13は比較的精良な胎土。須恵器皿A(11)は、口縁部はやや内湾気味に垂直に立ち上がる。底部外面は全面へら削りとする。胎土には、砂

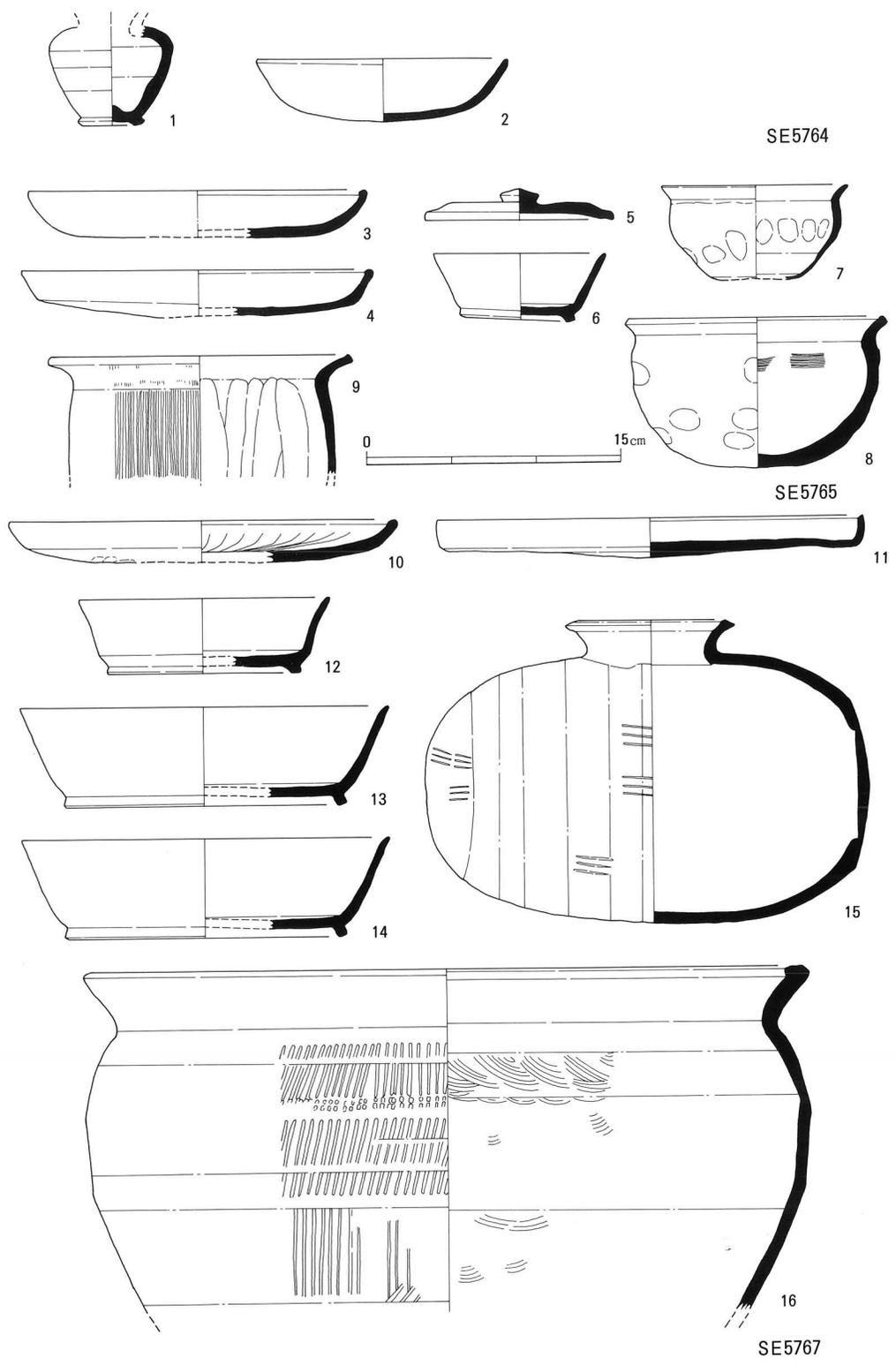


fig.12 江戸出土土器 (1 : 4)

粒を多く含む。蓋の可能性も考えられる。 須恵器横瓶 (15) は最下層から完形で出土した。体部を粘土紐で成形し、軽く叩いたあと、横方向にナデ調整を行なう。口頸部を取付け、右端をふさぎ削りで仕上げる。一部に降灰が認められる。 須恵器甕 C (16) 同心円当具と平行刻み目の叩板で成形したのち、外面は幅 1 cm 前後のロクロなでを 3 ~ 4 cm の間隔で横方向にいれる。内面はナデによって当具痕がほとんど消される。

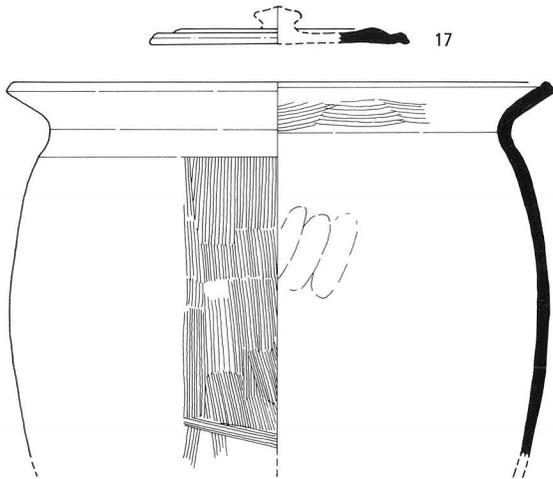


fig.13 SE5768出土土器 (1 : 4)

SE5768 調査区南の井戸。

土師器甕 A (18) 体部外面は粗い縦ハケ目。口縁部は内面に粗い横ハケ目を施したのちに口縁部全体をヨコナデで調整する。体部内面はナデ調整とするが、成形時の指頭圧痕をとどめる。

須恵器杯 B 蓋 (17) 偏平・厚手で、胎土に砂粒や黒色粒を含む。頂部はナデ調整。

18 土器出土土器 (fig. 14-18)

SK5769 調査区南の大形土壇。平

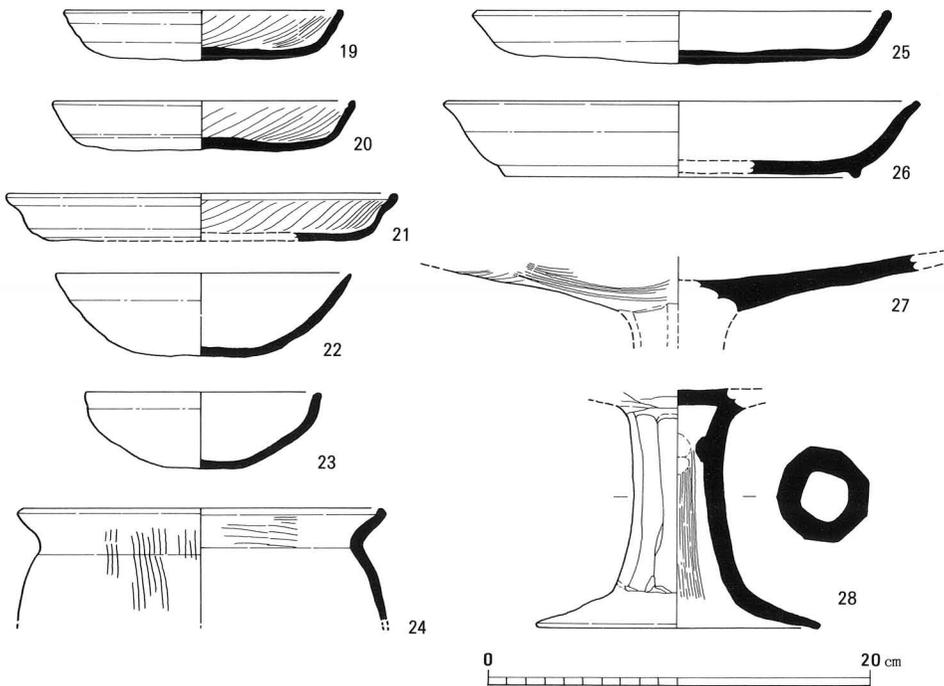


fig.14 SK5769出土土器 (1 : 4)

面不整形で浅く、埋土は単一の赤褐色粘質土。大量の土器が出土した。土師器は須恵器に比べて細片が多く、全形の知られる資料が少ない。このため今回は計数処理を断念せざるをえなかったが、須恵器に比べ土師器の分量は少ない。

土師器 皿 A 4点。須恵器の甕 A (76) の体部破片とともに土壌底から出土した。いずれも口縁部外面を横ナデ調整。底部外面を不調整とし、ミガキを行わない。a0手法。25を除く3点(19-21)には、口縁部内面に粗い放射状暗文を施す。25の底部外面には木葉圧痕をとどめる。19・25がI群土器。 皿 B 器壁が厚く、高台は低い。調整不明。

I群土器。 椀 A 口縁部をヨコナデするが、以下の調整は不明。II群土器。 椀 C

口縁部をヨコナデし、以下は不調整とする。 高杯 2点。27はかなり大型の高杯。外面に丁寧なミガキを施す。脚柱部28は27とは別個体。脚柱部は縦方向の削りによって9面に仕上げる。脚部内面下半は粗く削る。脚柱部内面には成形時の余分な粘土塊が残る。

甕 A (24) 口縁部から体部にかけて非常に粗いハケ目を残す粗製の甕。

須恵器 杯 A (38-40・49-50) 38・40・49・50の4点は焼きがあまく、灰白色から茶灰色に焼き上がる。いずれも底部外面にヘラ切り痕をとどめる。II群土器。 杯 B 大きさによって、口径19cm前後のA I (54-60)。口径15cm前後のA III (46-48)。口径12cm前後のA IV (43-45)。口径10cm前後のA V (32-37)。ほとんどがI群土器で、青灰色を呈し、硬質の焼きとなる。34は内面が暗紫色を呈し、猿投産の可能性がある。37は高台内面に墨痕があるが判読できない。 杯 B 蓋。身に比べ蓋の出土量が少ない。大きさによって杯 B I 蓋 (52・53)、杯 B III 蓋 (41・42)、杯 B V 蓋 (29-31) に分けられる。41以外はI群土器。41は小砂粒を多く含む胎土で、灰白色に焼き上がる。上面全面に暗灰緑色の自然釉がかかる。 杯 E (51) 灰白色の軟質の焼き。表面の磨滅が著しく調整手法は不明。

皿 B (65・66) いずれも底部外面をヘラ削り、口縁部をロクロなどでとする。65は灰白色。66は灰色に焼き上がる。 皿 C (63・64) 杯 A と同じく灰白色に焼き上がる。

壺 C (61) 体部をロクロなどでとし、底部をヘラ切り不調整とする。口縁部を欠失するがほぼ完形。 高杯 (62) 脚柱部から杯部外面にかけてロクロなどで、杯部内面はヨコナデとする。精良な粘土で灰色を呈する。

壺 A (74) 完形。土壌底で、甕 A (76) の体部破片に混じって出土した。体部下半をロクロ削りとし、その他はロクロなどで仕上げる。肩部に薄い降灰がみられる。 壺 K (72・73) 72は高台のない器形。底部外面を除く全面をロクロなどでとし、底部外面には糸切り痕を残す。肩部から頸部にかけて濃緑色の釉が厚くかかる。壺 Q と同様の胎土・釉調を示す。73は、高台のつく器形。頸部から上を欠失する。体部下半の高台直上に左上がりの平行タタキが部分的に残る。タタキで成形の後、ロクロ削りを行い最後にロクロなどで調整する。高台と体部との境には強いなでが入る。肩部に厚く釉がかかるが、一部釉化せず灰色となる。胎土に黒色粒子を多く含み、削りによってぼかしたように黒色粒子が流れる。II群土器。 壺 L (70)

体部下半の破片。外面はロクロ削りした後、ロクロなどで調整。底部内面に自然釉がかか

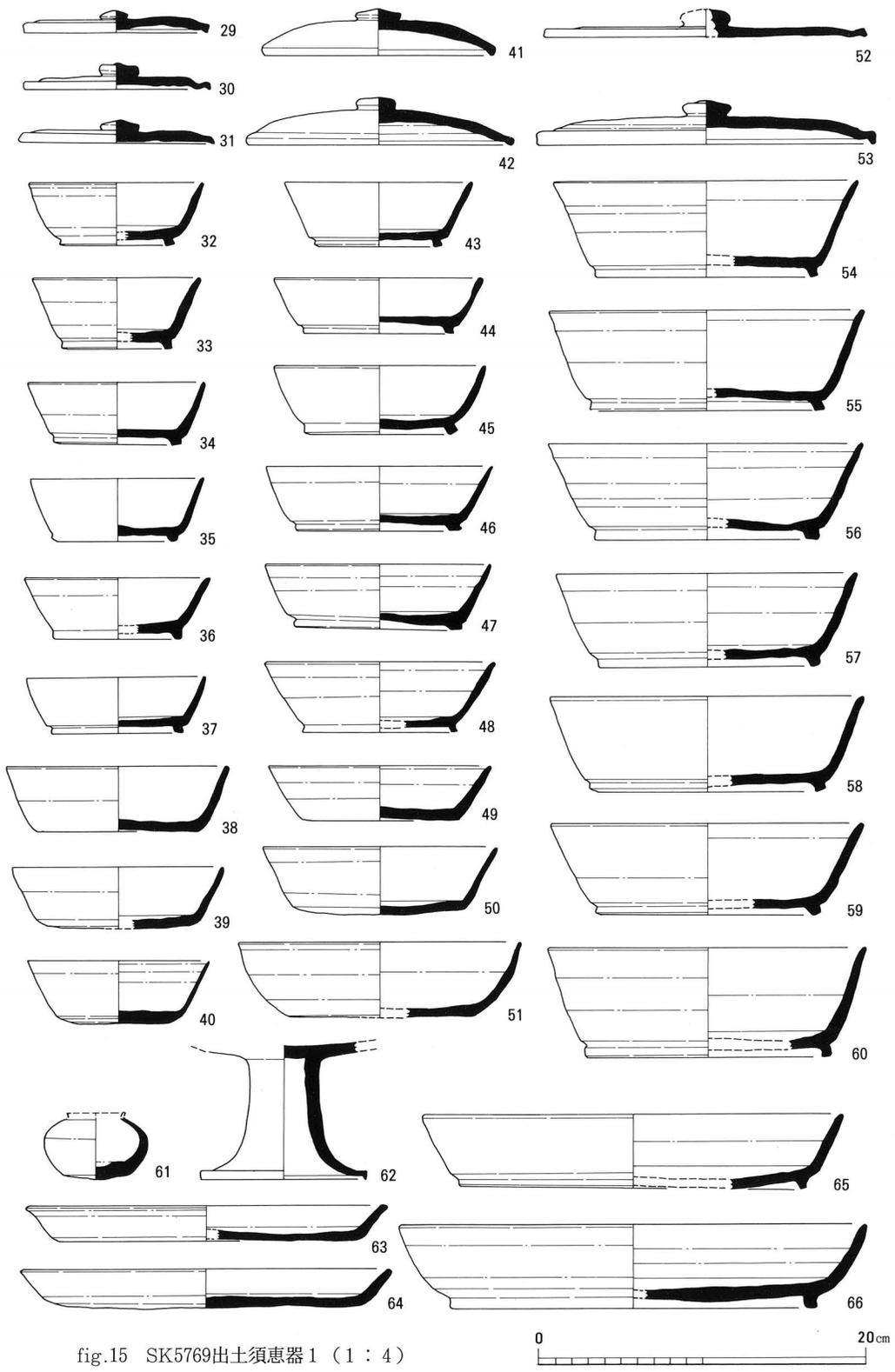


fig.15 SK5769出土須恵器1 (1 : 4)

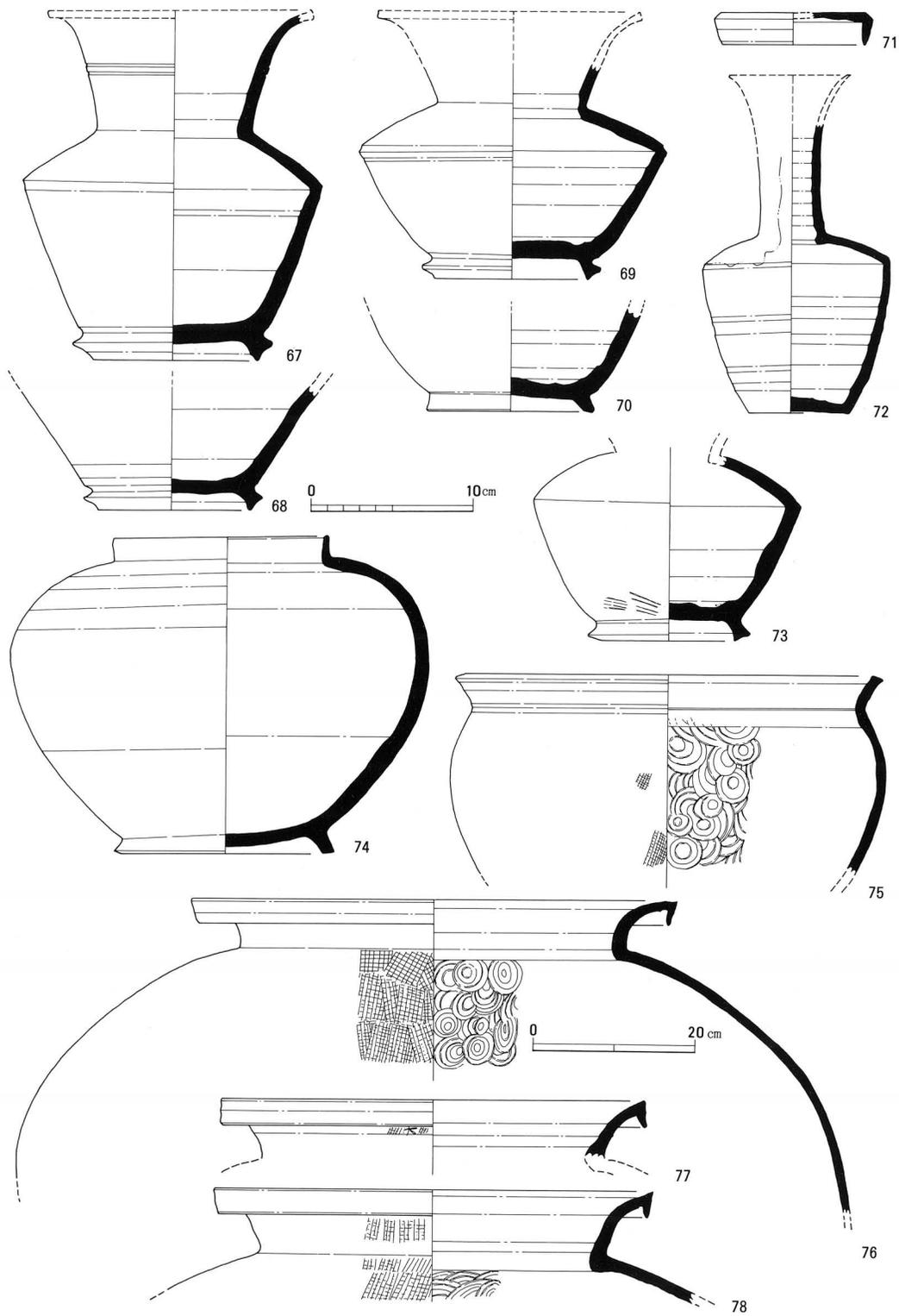


fig.16 SK5769出土須恵器2 (67-75 1:4 76-78 1:8)

る。 壺 Q (67-69) いずれも砂粒を多く含む胎土で、灰色に焼き上がる。肩部・口縁部内面・底部内面に濃緑色の釉が厚くかかり、67では体部から高台へと流下する。体部外面をロクロ削りした後、全面をロクロなで調整する。高台は断面が三角形に張り出す特徴的な形となる。 甕 A (76-78) 口径59.6cm (76)、口径54cm (77)、口径52cm (78) を計る大形の甕。76は口縁部から体部中位までの破片が接合でき、底部の破片もある。底部破片には焼台の痕跡が4箇所認められる。自重のためか底部にかけてひしゃげた俵形に近い形となるようだ。復原体部径は約110cm、復原高約90cm。77は口縁と体部の破片が残り、78は口縁部の小破片のみである。いずれも口縁部端に大きな縁帯をつけ、頸部から体部全面を格子目タタキで成形、内面には同心円当具痕を残す。78の頸部には「大」の線刻がある。砂粒を多く含む胎土。 甕 C (75) 体部外面に格子目タタキ、内面に同心円当具痕を残す。外面はタタキの後にいねいなで調整を行うため、タタキはほとんどで消される。焼成は軟質で灰白色を呈する。 壺蓋 (71) 器形は壺蓋 A に類似するが、形が小さいので壺 K や L の蓋と考えた。上面が降灰のため灰白色となる。壺 K (72) と壺 Q (67-69) は、灰色に焼上がり、濃緑色の釉がかかる。陶邑古窯跡群の製品とはあきらかに異なる。東海もしくは北陸地方の製品の可能性がある。

SK5770 SK5769同様、土師器が少なく須恵器が多い。

土師器 杯 C (80-82) いずれも口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする a0 手法。I 群土器。 皿 A (83・84) いずれも口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする a0 手法。84では底部外面の中央に指頭圧痕が残る。83はII群土器。84はI群土器。 皿 C (79) 口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする。皿 C としては器高が大きい。 甕 A (105) 口縁部をヨコナデ、体部外面は粗いハケ目で調整する。内面は粗くヨコナデするが、指頭圧痕も残る。底部外面にすずが付着する。

須恵器 杯 A (93・94) いずれも底部外面にヘラ切り痕を残し、口縁部内外面はロクロなで。93は砂粒の少ない精良な胎土で、焼成は軟質。94は砂粒を多く含む胎土で、焼成は堅緻。外面に重ね焼きによると見られる焼けむらがある。 杯 B (89-92) 89・90は杯 B V。底部外面にヘラ切り痕をとどめ、口縁部はロクロなでとする。91は杯 B II。胎土に黒色粒子を多く含む。底部外面に墨書がある。92は杯 B I。軟質で灰白色を呈す。口縁部外面中位から上が黒変する。 杯 B 蓋 (85-88) 85から87の3点は、口縁部 A 形態で、全面をロクロなでとする。暗灰色。88は口縁部 B 形態で、頂部上面をロクロ削りとする。口縁部内面に幅1cm前後の降灰がみられる。 壺 M (104) 高台と体部の境が不明瞭で、高台の貼り付けや全体の調整が雑である。胎土に砂粒を多く含む。

高杯 (106) 大形の高杯。脚柱部内外面から杯部外面をロクロなでとする。脚柱部中位に沈線が入る。焼成は軟質で灰白色。 鉢 D (109) 内外面をていねいなで調整とする。焼成は軟質で灰白色。 甕 B (107・108) 107は体部外面に格子目タタキを残すが、ていねいなでによって消された部分が多い。体部内面は、口縁部直下にもみ指頭圧

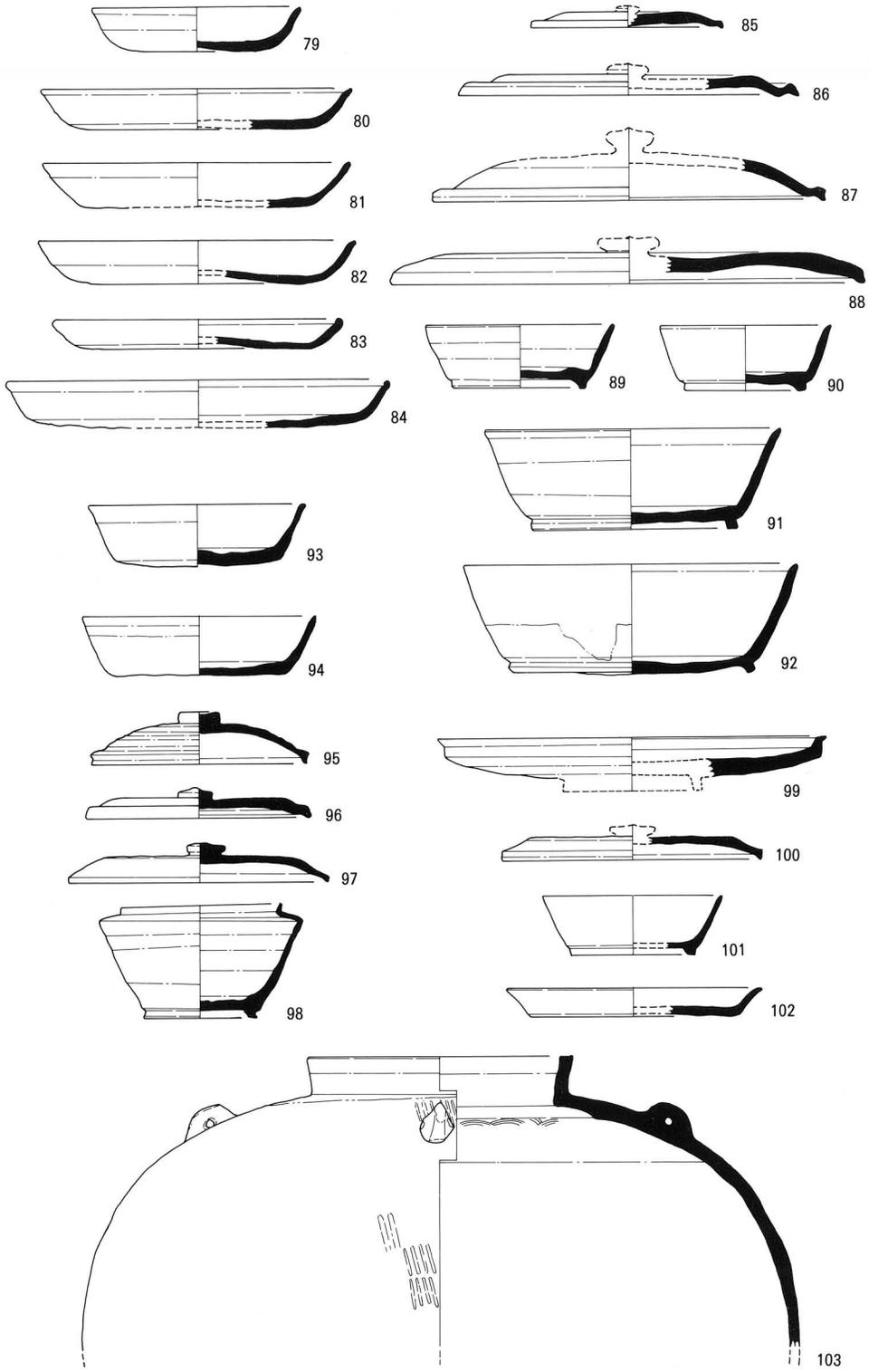


fig.17 土壙出土土器 1 (1 : 4)

0 20 cm

痕があり、それ以外の内面には同心円当具痕が残る。底部には焼き台として使用した杯 B 蓋が融着する。体部上半に厚く濃緑色の釉がかかり、下半部に流下する。ほぼ 1 個体分の破片がある。胎土や焼成、釉調が、SK5769 出土の壺 Q に類似する。108 は、体部外面に粗い平行タタキ目。内面に同心円当具痕を残し、口縁部はヨコナデとする。 甕 C (110・111) 110 は内外面をていねいにヨコナデする。体部外面にはかすかに格子目タタキの痕跡が残る。焼成は軟質で、灰白色。111 は外面に右上がりの平行タタキ目。内面に同心円当具痕を残す。口縁部は内外面ヨコナデ。体部外面はタタキの後、帯状にヨコナデを施す。焼成は堅緻で灰色。口縁部外面に「++」の線刻がある。

SK5773

須恵器 杯 B (101) 杯 B V。内外面ロクロなどで調整。 皿 A (102) 底部外面は不調整。その他はロクロなどで。 杯 B 蓋 (100) 頂部上面をロクロ削りとし、口縁部はロクロなどで。「石」の墨書がある。 甕 E (103) 外面に粗い格子目タタキ、内面に同心円当具痕を残す。タタキ成形の後、内外面にていねいな調整を行うためタタキ痕と当具痕はほとんどで消される。体部は薄く仕上げられる。肩部の 4 箇所には耳を付ける。耳は半円形の粘土板に竹管状の工具で穴をあけ体部に貼り付ける。肩部に厚く自然釉がかかり、体部中位へと流下する。ほぼ 1 個体分の破片が残される。器形、胎土、釉調などが、SK5769 出土の壺 Q などに類似する。

SK5774

須恵器 杯 B 蓋 (95-97) 95 は頂部上面をロクロ削りとし、それ以外はロクロなどで。なでによる凹凸が顕著。口縁端部が黒褐色に変色し内面に降灰がみられる。胎土や口縁部の形状などから V 群土器、猿投産と推定される。96、97 はいずれも口縁部を中心にロクロなどで施す。焼成は軟質で灰白色から灰色。 皿 B (99) 焼成軟質で灰褐色を呈する。外面をロクロ削り後ロクロで。口縁部から内面にかけてロクロなどで。これも V 群土器か。 壺 E (98) 底部へラ切り後、全面をロクロなどでとする。内面にロクロなどでによる凹凸が顕著。

墨書土器・硯 (fig. 19)

墨書土器 10 点。線刻土器 2 点出土した。

SK5769 からは、須恵器杯 B V (37) 「厨」、須恵器杯 B I (112) 「加」、須恵器皿 C (63) 「田」、須恵器杯 B (114) 「田」。SK5770 からは、須恵器杯 B I (91) 「飯」。SE5768 からは、須恵器杯 B (115) 「米」、須恵器杯 B (119) 「大大」の線刻土器。SE5764 からは、須恵器杯 B (118) 「正」。SK5773 からは、須恵器杯 B 蓋 (100) 「石」。SK5774 からは、須恵器杯 B 蓋 (113) 「加」。調査区中央東よりに堆積する暗灰褐砂質土からは、須恵器杯 A I (117) 「大」、須恵器壺 G (116) 「井」線刻土器が出土した。

硯 (120-122)

蹄脚硯 (120)。復原径 25.6 cm。黒色粒を多く含む胎土で焼成は堅緻。脚部に降灰が見られる。 圈足円面硯 (121・122)。121 は脚部下端の破片、長方形の透し。ON34 区 東西溝出土。

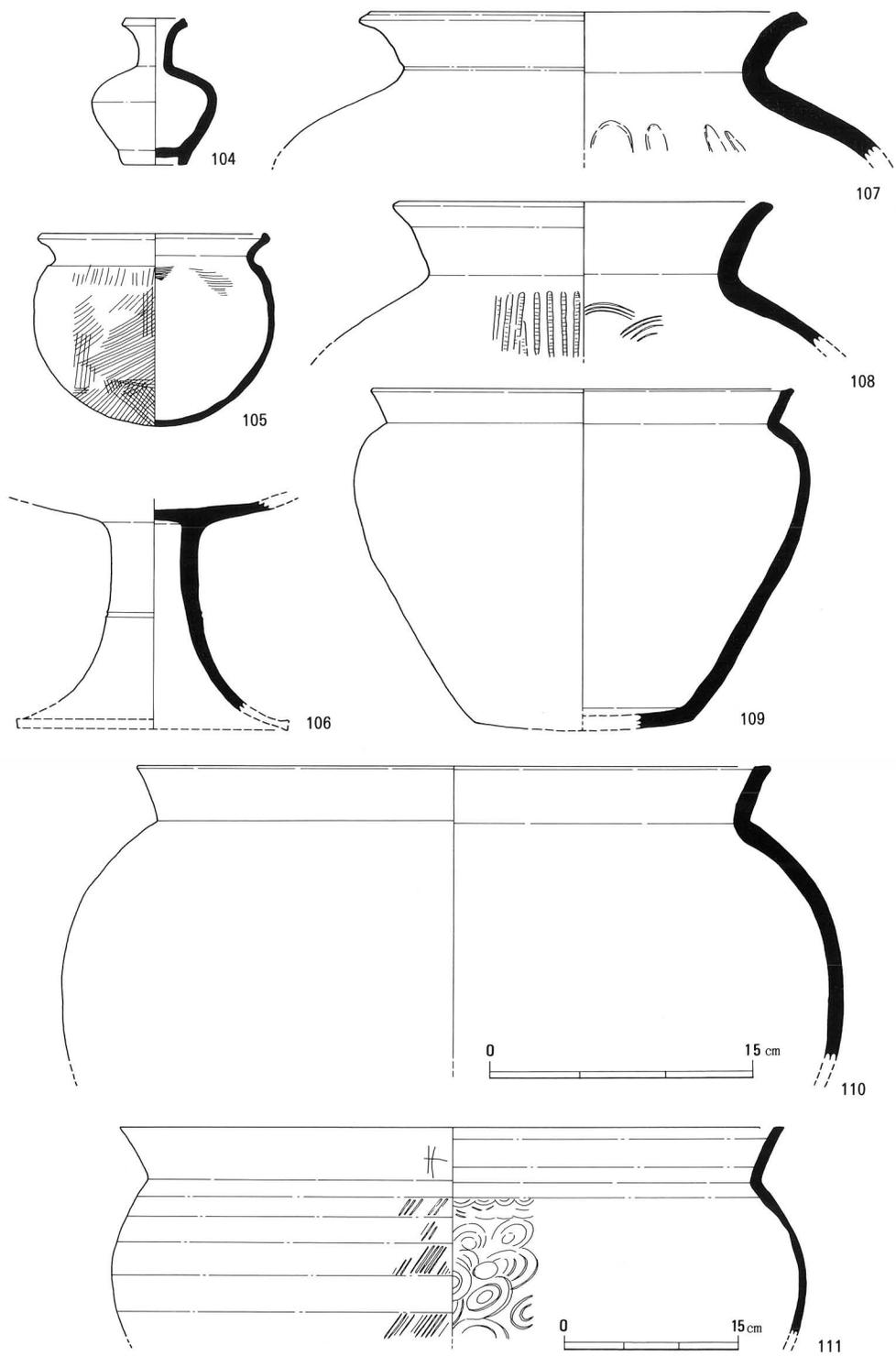


fig.18 土壙出土土器2 (104-110 1 : 4 111 1 : 6)

122は脚柱部の破片、逆台形の透しを入れる。SK5769出土。

施釉陶器他 (fig. 19)

火舎状土器 (123 fig.21)

底部外面ロクロ削り、体部内外面はロクロなでとする。体部下半の破片のため全形は不明だが、上に向い徐々に径を縮小しており、壺Pの体部に似た形状に復原される。体部中位に2条の沈線と、2ヶ所に円形の透しがある。透し内には唐草状の簡単な文様が入るようだ。下半には貼花文の手法による草花文を飾る。草花文は、別につくった陰刻型で型取りした文様を貼り付けたもので、唐三彩の影響を受けたものと思われる。小さな黒色粒子を含む胎土で、外面の釉も黒色粒子が混じりごま塩状となる。猿投産と考えられる。

ミニチュア土器 壺A蓋 (125) 高い宝珠形鈕をもつ蓋。頂部上面に厚く濃緑色の釉がかかる。SB5763の西南隅柱掘形より出土。猿投窯の製品と推定。

二彩陶器 (124) 口縁部の破片、口径約36cmの大形の盤になるものと思われる。内外面ともに施釉する。銀化が著しく、白土部分は漆黒色に、緑釉部分は暗緑色に変色している。きわめて精良な胎土で、焼成は軟質。

不明土製品 (126 fig.20)

左右と上端は当初の面を残し、下端のみが折損の跡をとどめる。粘土板上に、粘土を盛り上げヘラで文様を作り出す。文様は金銅仏の宝冠などに類例を見ることができる。中央に3列で連なる円弧は葡萄の房を形象化したもので、その上には唐草が左右へそれぞれ3単位反転する。葡萄唐草文の変形した文様と考えられる。用途はまったく不明であるが、

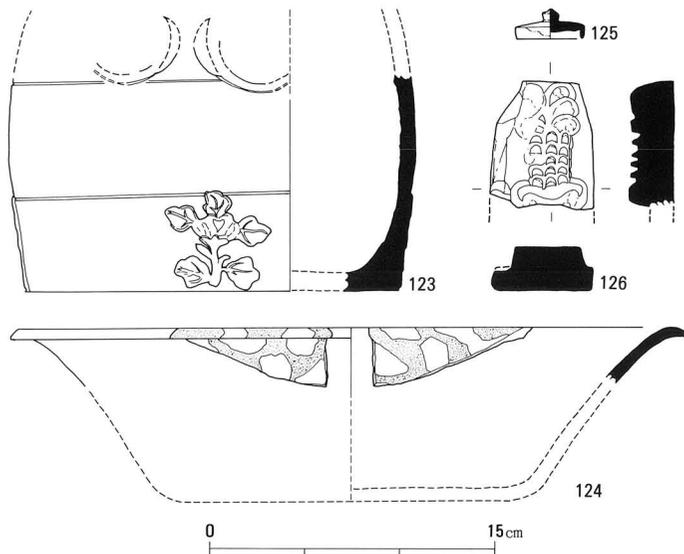


fig.19 施釉陶器他 (1 : 4)



fig.20 不明土製品 (1 : 2)



fig.21 火舎状土器 (1 : 4)

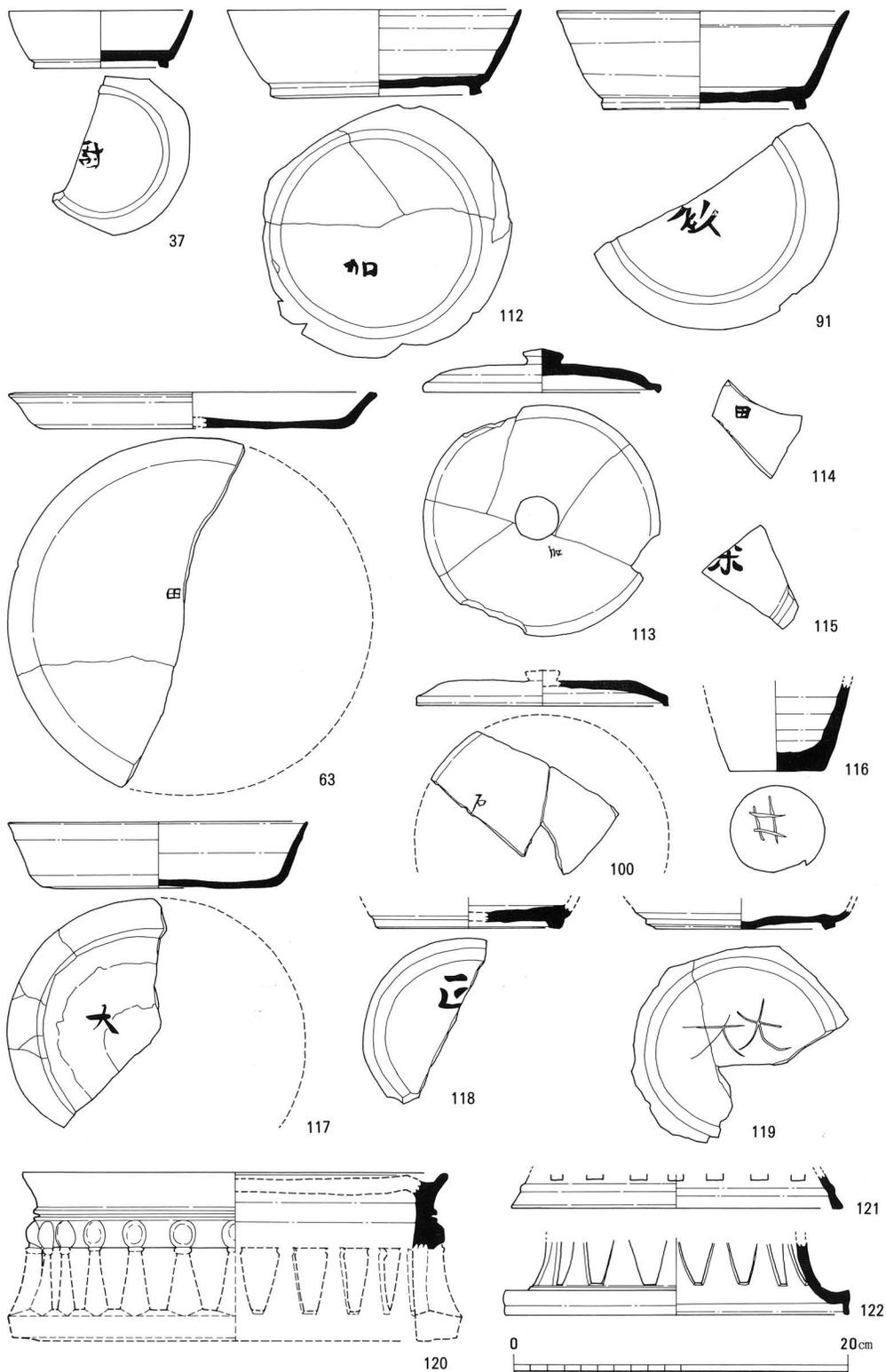


fig.22 墨書土器・硯 (1 : 4)

下面のみが破断面となるところから、ベースとなる板もしくは円帯状のものから立ち上がり、何らかの装飾的な用途を持っていたものと推定される。精良な胎土で、焼成は軟質。表面は黒色を呈する。瓦の焼成に類似する。

古墳時代土器 (fig. 26)

高杯 (127・128) 蓋付きの高杯。蓋127は頂部上面をロクロ削りとし、口縁部内外面をロクロなどで、頂部内面はヨコナデとする。高杯128は杯部外面をロクロ削りとし、一条の沈線を入れる。3ヶ所にヘラ切りによる透しを入れる。 **杯蓋 (129) 杯身 (130・131)** 杯蓋では頂部外面をヘラ削りし、口縁部内外面はロクロなどで、頂部内面はヨコナデ調整とする。杯身では底部外面をヘラ削りし、口縁部内外面はロクロなどで、底部内面はヨコナデ調整とする。いずれも身受けと蓋受けの端部に一条の沈線がはいる。以上の高杯・杯蓋・杯身はいずれも黒色粒子を多く含む胎土で、焼成堅緻、灰色。 **壺 (132)** 口頸部を欠失する。体部上半は、カキ目調整。下半には細かな格子目タタキを部分的に残す。内面はヨコナデ調整、ナデ痕が顕著。肩部は降灰のため灰白色となる。砂粒の少ない胎土。焼成堅緻。底部に「十」の線刻がある。有蓋高杯と杯身 (131) は、6世紀前半代。杯のセット (129・130) は、6世紀中葉と考えられる。

まとめ

時期 既刊の『平城宮発掘調査報告』に従い、主要な遺構の土器の時期を、平城宮土器編年の中に位置づけておく。井戸出土土器では、SE5765出土土器は、杯Aに暗文がなく、底部から口縁部までをヘラ削りするc0手法によっており、平城宮土器編年IV期。ただし放射1段暗文のある土師器杯A口縁部破片が出土しており、井戸の構築は平城宮土器編年III期に遡る。SE5767出土土器は土師器皿Aがa0手法でラセン暗文+放射暗文をもつところから、平城宮土器編年III期に位置づけられる。土壇出土土器では、SK5769出土土器は、皿Aがa0手法で製作され、粗い放射状暗文を持つところから、平城宮土器編年III期の新段階頃と考えられる。SK5770出土土器は、杯Cがa0手法で調整されるとともに、杯C・皿Aともに暗文がなく平城宮土器編年IV期もしくはV期に位置づけられよう。

特徴 今回検出した土器群の特徴として特記されることは、東海地方周辺の古窯産土器が多く含まれていることである。SK5769の火舎状土器、SK5774の杯B蓋、SB5763のミニチュア土器はV群土器、愛知県猿投窯産と推定される。SK5769の壺類、SK5773の甕は産地がはっきりしないが、東海地方かあるいは北陸地方に窯を求め得るかもしれない。特に数量的には後者の土器が目立つ。SK5769からは壺K・Qや壺A蓋をはじめとして、図示できなかった破片を含めると、かなりの量の出土がみられる。また器形では、杯皿類が少なく、SK5773から出土した甕をはじめとした貯蔵形態のみが出土しており注目される。さらに、計数処理を経た結果ではないが、土器を多く出土したSK5769と5770の2箇所の土壇からは、巨大な甕をはじめとする、貯蔵形態の出土が顕著である。

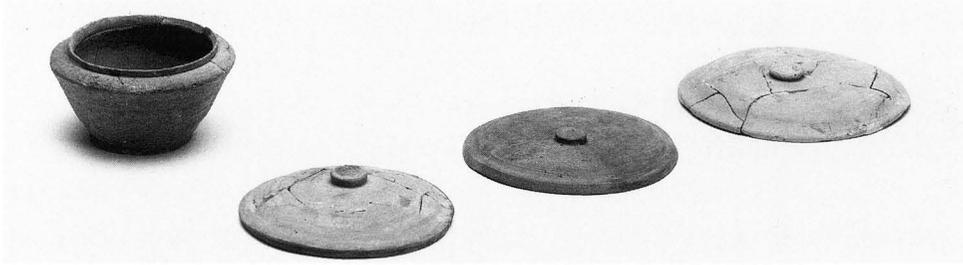


fig.23 SK5774出土土器

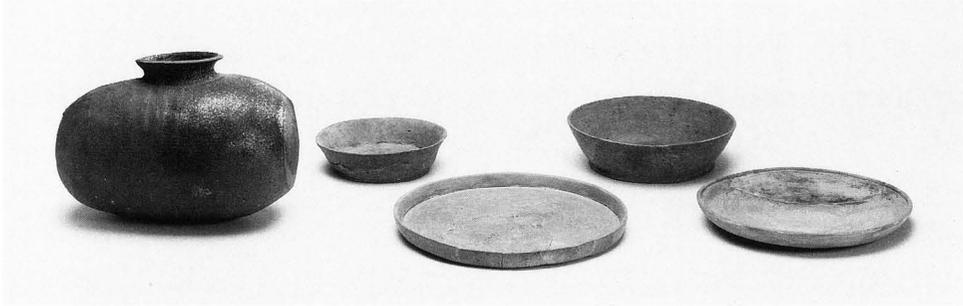


fig.24 SE5767出土土器

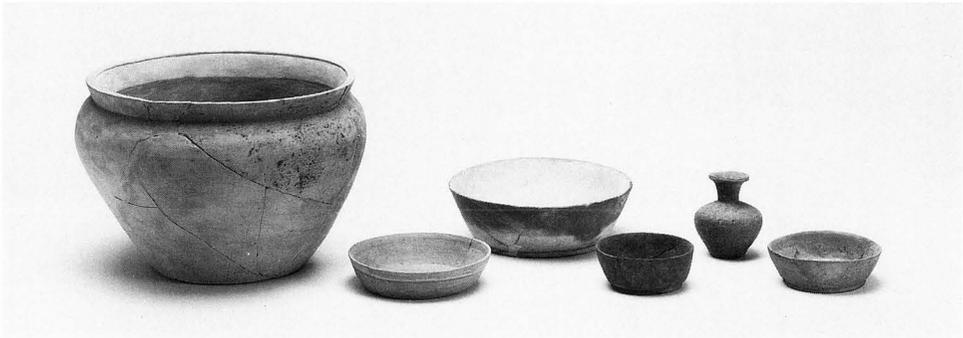


fig.25 SK5770出土土器

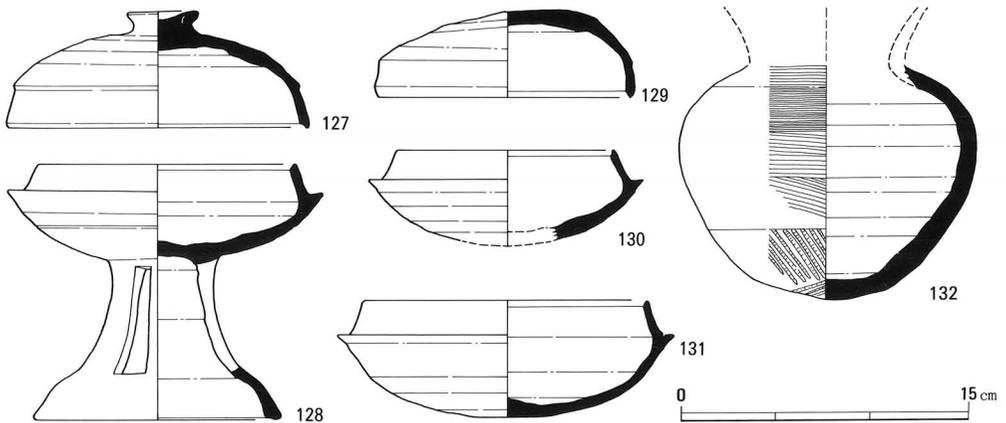


fig.26 古墳時代土器 (1 : 4)

2 瓦 埴

軒丸瓦 8 点、軒平瓦 5 点、丸瓦 674 点、平瓦 2810 点、埴 7 点が出土した。1 は 6275A で、高台瓦窯で生産され藤原宮から運ばれてきた瓦である。2 は 6282Bb で、瓦当裏面の接合粘土は多い。6282Bb は従来年代を新しく考えていたが、1988 年の二条大路南側溝の発掘で木屑層から出土したのがあり、古く遡るかどうか検討を要する瓦である。3 は 6282G で、6282B~H の中では瓦当裏面の接合粘土が最も少ない瓦である。4 は 6313Aa で、小型の軒丸瓦。5 は 6691A で、顎に幅 1.7cm の面をもつ曲線顎である。6 は 6695A で、直線顎。7 は 6711A で、直線顎。6711A は平城京羅城門跡での出土が知られる。6711A の中には平瓦部凹面に模骨痕跡を残すものと残さないものとの両者があり、本例は模骨痕跡を残さない。8 は 6721D で、顎に幅 1.5cm の面をもつ曲線顎である。6721D は後に范割れが生じるが、本例は范割れ以前のものである。他の軒丸瓦 4 点、軒平瓦 1 点については、型式を確定できない。

丸瓦は、総数 674 点 66kg、平瓦は、総数 2810 点 232kg である。3 m 方眼の中で丸平総計

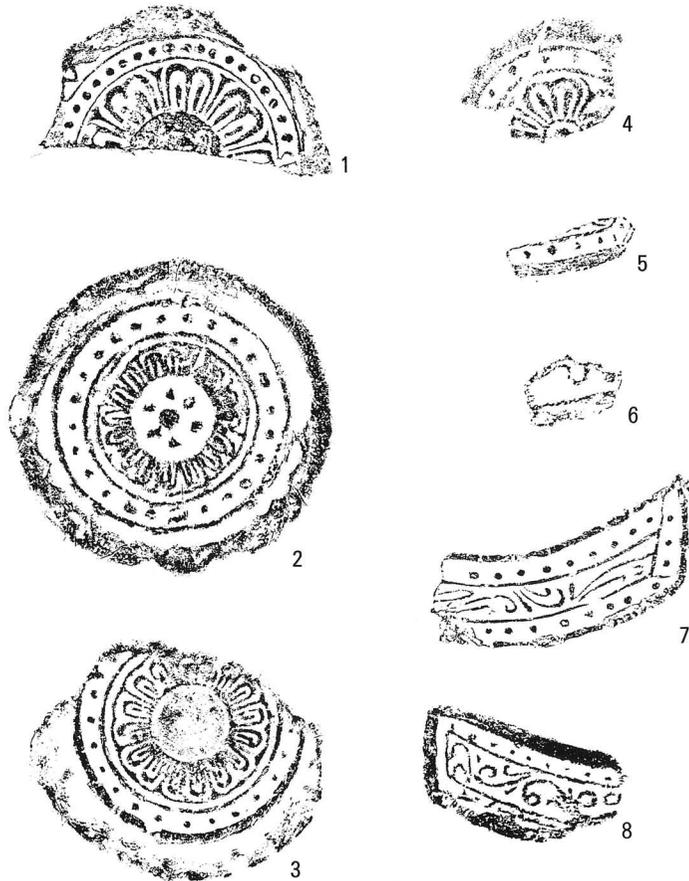


fig.27 軒瓦 (1 : 4)

10kg以上の瓦を出土したのは6区であり、いずれも SK5770、SK5769、SE5768、SE5767、SE5766、SE5764のように土壌又は井戸から出土した瓦が多く、総量の35%を占めている。したがって、同じ型式番号の瓦がそれぞれ1点づつしか出土していないことと考え併せて、発掘区内での瓦葺建物の存在は否定的にならざるをえない。なお、埴が7点出土しているが、OF区からON区の間で散漫に分布している。

3 木製品・石製品・金属製品

木製品 (fig. 28-30)

5基の井戸 SE5764~5768からの出土品である。板状品・棒状品などを含め37点が出土したが、小破片で原形の不明なもの、井戸枠の断片と思われるものなどを除き、25点のみを報告する。

斎串 (1・2) 祭祀具としては斎串2点が井戸 SE5765埋土から出土している。1はヒノキの柾目薄板の上端を圭頭状に、下端を剣先状につくったもので、上端近くの両側縁に2ヶ所の切込みを入れる。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』(以下『木器集成図録』と省略)でCⅣ型式と分類されるものである。長14.5cm、幅1.8cm、厚さ1.9mm。2はスギ板目板製で、両側縁上端近く1ヶ所に切込みを持つCⅢ型式のものである。長16.4cm、幅2.1cm、厚1.8mm。 **尖端板 (3)** 一端を剣先状につくり、形状は斎串に似るが、通常のものに比べてやや厚く、また断面をそのまま残すことなどから斎串とは見做し難い。残長17.1cm。幅1.6cm。厚3.1mm。井戸 SE5764曲物内出土。 **木筒状木製品 (4)**

いわゆる付札状木筒で、上下両端近くの両側縁に三角形の切込みを入れるもの。ただし、両端ともにその切込み部分で縦方向に折れる。ヒノキ柾目材で、表面には削り痕が明瞭に残る。ほぼ中央の一側縁に1ヶ所、他の側縁に2ヶ所、紐の当たりかと思われる凹みが見られる。墨痕が見られないことから、文字を削りとった後に破棄されたものであろう。長25.9cm、幅3.0cm、厚6.7mm。 **尖端棒 (5-7)** 井戸 SE5768枠内から3点を検出した。5・6はヒノキ製、7はスギ製で、いずれも一端を削り出し、尖端状に整える。長さは5が24.1cm、6が29.6cm、7が31.5cm。 **丸棒 (8)** ヒノキの割材からつくる断面円形の棒。残長22.3cm、径1.6cm。井戸 SE5768掘形出土。 **箸 (9・10)** 箸と思われる棒状品が井戸 SE5765埋土から2点出土している。いずれもヒノキの木片を小割りにしたのち、棒状に整形したものである。9は断面隅丸方形で長18.6cm。10は断面長円形で長15.3cm。 **角棒 (11)** ヒノキ割材からつくる角棒。先端をやや細く整える。残長9.3cm。井戸 SE5765出土。 **横櫛 (12)** 『木器集成図録』にAⅡ式と分類される横櫛の断片。1cmあたり11~12本の歯を挽き出している。イスノキ製。SE5765枠内出土。 **葉壺 (13)** 扁球形の体部に直立する短い口縁をつくり出す。下半を欠損しているため底部の形状は不明。漆をかけない白木作りである。ヒラギ材の横木取り。腹径5.8cm、口径3.3cm。器壁の厚さは一様ではないが、4mm前後である。SE5765掘形出土。 **円形曲物底板 (15-18)** 計4点。いずれもヒノキ柾目板製。15・16・18の3点はSE5767埋土出土で、15には4ヶ所、16には3ヶ所の木釘孔が残る。15は直径16.1cm、厚7.0mm。16は直径16.7cm、厚7.0mm。18は全体のほぼ半分の断片で、腐食が進行し釘穴の有無も判然としない。復原径16.9cm、厚6.9mm。17はSE5768枠内出土で、一面に黒漆をかける。同時に出土した側板断片にも湾曲する内面に黒漆が認められることから、漆は曲物容器内面に塗

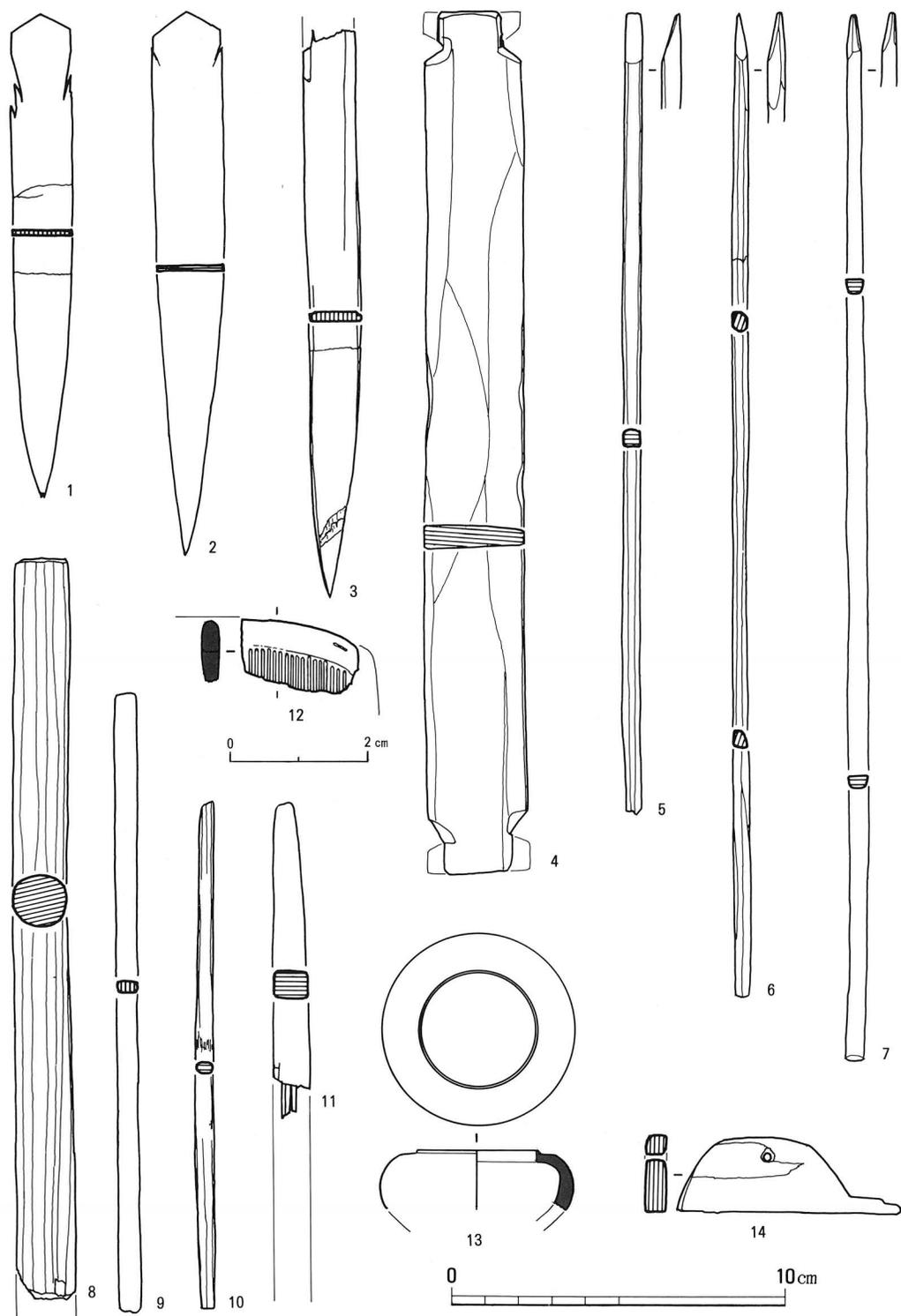


fig.28 木製品1 (1 : 2、12は1 : 1)

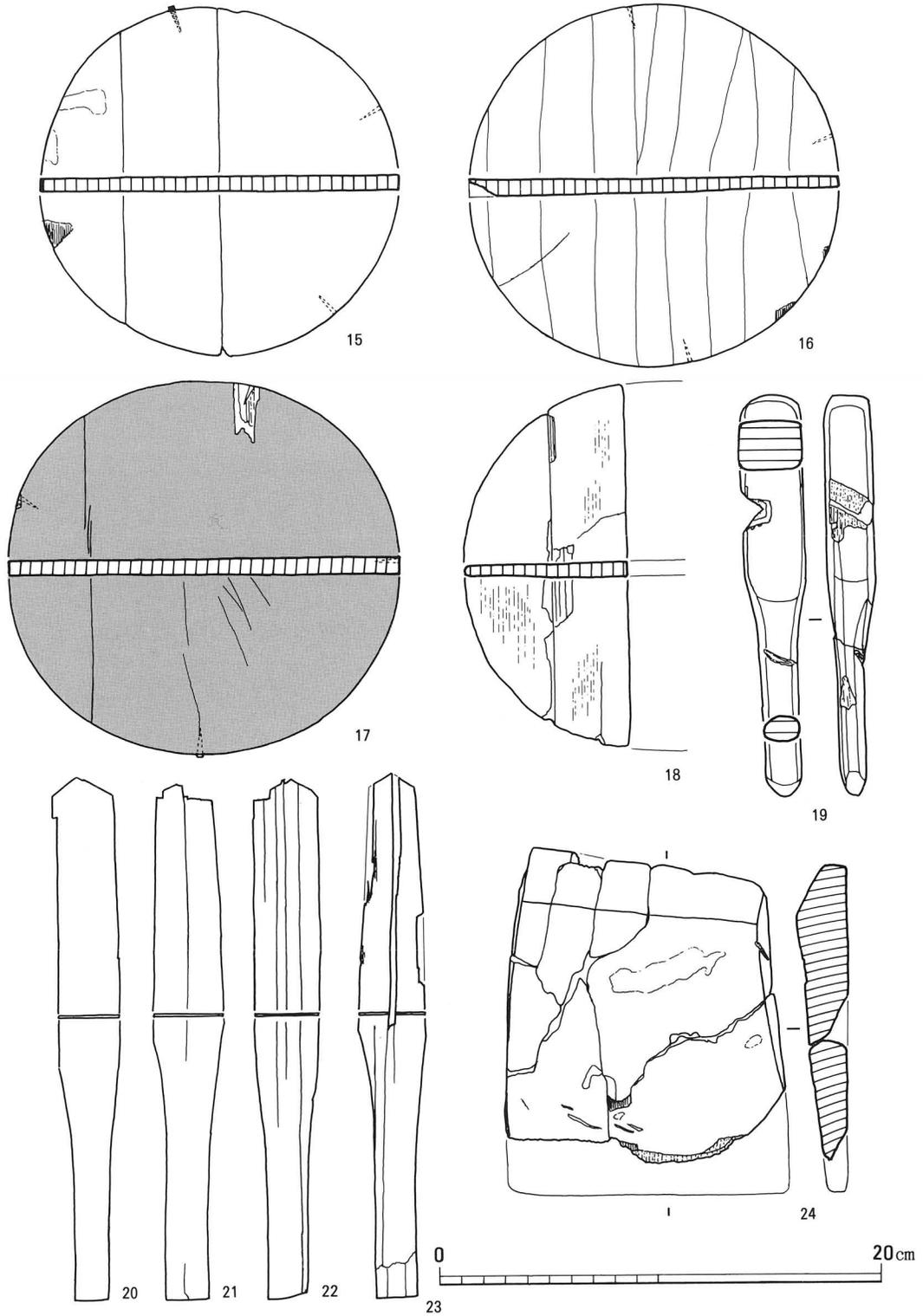


fig.29 木製品2 (1 : 3)

られていたことが判る。木釘孔が3ヶ所あり、うち1ヶ所には木釘が残存する。直径17.7cm、厚7.6mm。 **工具柄 (19)** アカガシ亜属の割材からつくる何らかの工具の柄。握り部分を細く削り出し、上半分を隅丸方形に整え、その一面に斜め方向の溝状の切欠きを入れる。縄などをかけるためのものか。用途は不明。長18.4cm。 **檜扇未製品 (20-23)** SE5765埋土から4点が一括して出土した。いずれもヒノキの薄板で、圭頭状を呈し、ほぼ中央で最大幅を持ち、本を細くしており、形状は檜扇に似る。ただし、厚さが約1mmと薄すぎることで、そして要の部分に孔も切欠きもなく、束ねることが不可能なことなどから扇の完成品とは考えられない。失敗作でもあろうか。長さはいずれも24.0cm前後。幅は2.7~3.2cm。 **円形曲物 (25-27)** 井戸 SE5764・5768の俗に目玉と呼ばれる下枠に使用されていた円形曲物が3点出土した。25は井戸 SE5764に用いられていたもので、直径42.6cm、高31.9cm。側板の上下縁に箍をはめる。いずれも1列外3段綴じ（綴じ方の呼

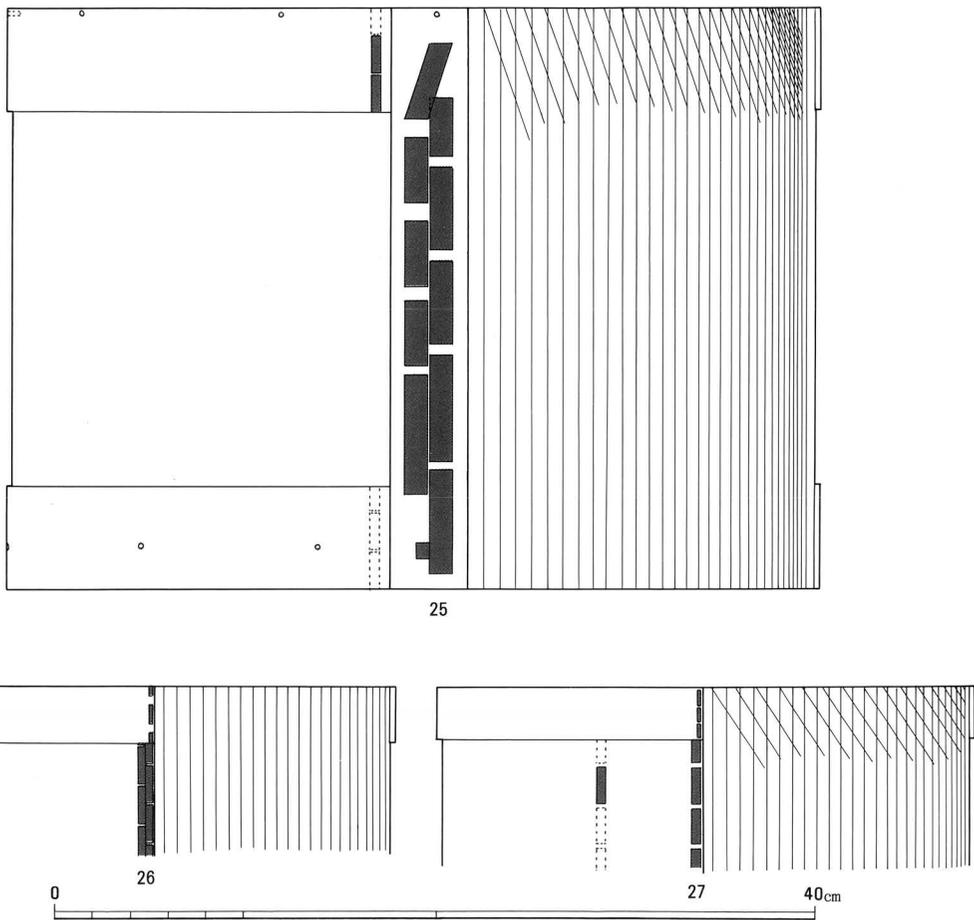


fig.30 曲物 (1 : 4)

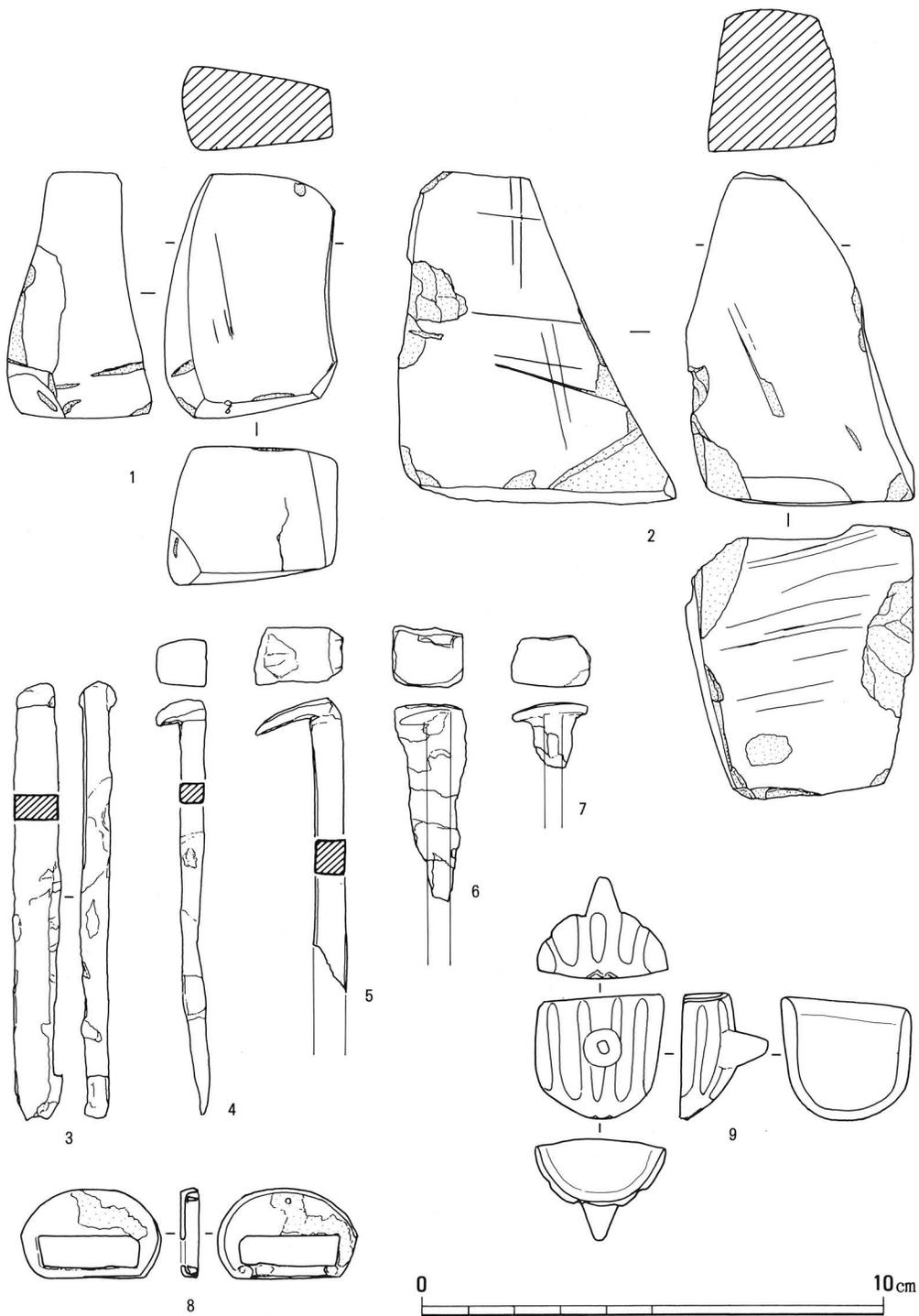


fig.31 石製品・金属製品 (2 : 3)

称は『木器集成図録』の分類に拠る)。上籬は13カ所で、下籬は8カ所で木釘どめ。側板の綴じ合わせは1カ所で、2列前内5段後内5段。内面には縦平行線のケビキを約8mm間隔でいれる。26・27は井戸SE5768の下枠として使用されていたもの。26は下段で、下半部を欠損する。直径26.2cm。上縁には籬をはめ、1列外3段綴じ。側板の綴じ合わせは1カ所で、2列前内4段以上後内3段以上。内面には縦平行線のケビキを約7mm間隔でいれる。27は上段で、やはり下半部を欠く。直径は28.3cm。上縁には籬をはめ、1列内3段綴じ。側板の綴じ合わせは1カ所で、2列前内4段以上後内4段以上。内面には約7mm間隔の縦平行線のケビキと、約1cm間隔の斜平行線のケビキをいれる。 **用途不明品** (14・24) 14はヒノキ柵目板の小片を半円形に整え、つまみ状の作り出しをこしらえたもの。身の部分の中央に一孔を穿つ。SE5765出土。24はクリの柵目板をクサビ状に一端を薄く整形したもの。腐食が著しく、使用痕等は不明瞭である。残長15.8cm。幅12.5cm。厚2.3cm。SE5768掘形出土。

石製品・金属製品 (fig. 31)

砥石 (1・2) いずれも石英斑岩ないしは花崗斑岩製である。断面不整形で、長軸方向の4面を使用する。1は小型の砥石で、長5.3cm、幅3.7cm、厚3.0cmを測る。一側縁が研ぎ減りで若干内凹する。SK5769出土。2はやや大型で、長7.2cm、幅5.0cm、厚6.0cmである。長軸方向の4面および下端面を使用しており、各面に研ぎ傷が残る。上下両面、左右両面ともに非対称に研ぎ減る。SB5752北側の土壌出土。 **鉄釘** (4-7) 鉄釘は計4点出土している。4~6は折頭釘である。上端を叩きのぼし、ほぼ直角に曲げて釘頭としたものである。4のみが完形で、長9.0cm。残りの2点は下端を折損しており、それぞれの残長は6.4cmと4.3cmである。銹化のあまり進んでいないものについては表面観察によって、また銹化の進んだものについては折断面の観察から、脚の断面はいずれもほぼ正方形を呈することが判る。出土地点は4がSE5765埋土、5はOO32区黄褐粘土、6はSB5757内の小穴。方頭釘としては、7の1点のみが出土した。銹化が著しいが、折断面の観察から、脚の断面は正方形。残長1.4cm。SE5765掘形出土。 **丸靱** (8) 帯金具丸靱の表金具で、ほぼ完形品。内面の三隅に鋌足を鋳出している。銹化がすすみ、保存状態は良くない。本来、表面に漆が塗られていたかどうか不明。高2.0cm、幅3.0cm、厚4.0mm。SK5770出土。 **不明鉄製品** (3) SB5753庇西端の柱穴から出土した断面長方形の棒状品で、長9.5cm。偏平な面の一端に突起があり、もう一端には、それと直交する面に突起がつく。突起の位置から見てかすがいとは考えられない。何らかの工具の軸部であろうか。 **不明青銅製品** (9) 瓜実を縦横に四分割した形状をとる小型の青銅製品。外面の中央に円錐台状の突起がつく。外面には縦方向に4条の溝状のくぼみがあるのに対して、内面は平滑。高2.6cm、幅2.3cm、厚2.0cm。SE5764枠内出土。

IV 考 察

1 条坊と遺構の占地

本調査区は左京三条一坊七坪のほぼ中央部に位置するが、発掘調査で見つかった各遺構が七坪の区画に対してどのような位置にあたるのかを検討するために、はじめに七坪四周の条坊の復原を行い、つぎに道路・建物等との位置関係を検討したい (fig.33 参照)。

まず、南北方向の条坊であるが、七坪は東を東一坊坊間路、西を東一坊坊間西小路に面する。東一坊坊間路に関連する遺構は3ヶ所で見つかっている。①平城宮南面東門(壬生門、平城宮跡第122次調査)、②当該七坪位置における西側溝(奈良市1983年度調査)、③左京七条一坊十一坪位置における東側溝(奈良市1983年度調査)、である。②の西側溝と③の東側溝の調査地が2.5kmも離れているために、東一坊坊間路の幅員を遺構から直接に確認することはできないが、壬生門の中心が東一坊坊間路の中軸線上にあり、かつ、東一坊坊間路の国土方眼方位に対する振れが朱雀大路調査(奈良市、1974年)で確認した北で西に15分41秒であると仮定すると、②の位置では東西両側溝心々で21.3m、③の位置では21.9mとなる。両者の数値が近似することから、この推定が妥当性を持つものと考えて東一坊坊間路の位置を復原した。

東一坊坊間西小路に関連する遺構としては当該坪西側で同小路西側溝とおぼしき溝が見つかっているが、この溝は前述の東一坊坊間路の推定位置、および、朱雀大路推定位置から復原される同小路西側溝の位置に対して約6.3mも西に寄った位置にあり、西側溝と断定することができない。したがって、ここでは東一坊坊間路の推定位置と朱雀大路推定位置の midpoint に東一坊坊間西小路があるものと推定しておく。

つぎに東西方向の条坊であるが、七坪は南を三条条間路、北を三条条間北小路に面する。三条条間路の遺構は見つかっていないが、三条条間北小路の遺構は朱雀大路に面する左京三条一坊一・二坪間で見つかっている(奈良市1986年調査)。ここで確認された小路心を東へ延長し、三条条間北小路の位置を求め、三条条間路もこの小路の南450小尺の位置に平行すると仮定して復原した。条坊の振れは南北方向で採用した15分41秒を用いた。

このようにして復原した結果が fig.32 である。南北道路 SF5776、東西道路 SF5777 ともに七坪の中軸線近くにあるものの、それぞれわずかにずれる。南北道路は中軸線に対して西へ約7mの位置にあり、東西道路は中軸線に対して南へ、同じく約7mの位置にある。また、南北道路の幅員が3.6m(側溝心間距離、約10大尺)であるのに対して、東西道路はその倍、7.2m(約20大尺)となっている。このような規格性から見ても、両道路は同時に存在した一連のものと考えられる。南北道路の東側、東西道路の北側で側溝が途切れたような状況であるから、両道路は坪の中央付近で鍵の手に折れていたのであろう。これらのことは両道路の東側、および北側の区画をより広く確保しようとした結果と見るこ

ともできよう。A 期の正殿と考えられる SB5758 と東西道路が位置をそろえることなども、両道路が坪を細分するものではなく、七坪内の一体的な地割りにもとづく施設であることを示しているのであろう。

七坪内における正殿推定建物の位置であるが、A 期の正殿 SB5758 は前述のように道路の東側にあり、南北中軸線の東約 18m に西妻、東西中軸線の南約 4 m の北側柱筋がくる。一方、B 期の正殿 SB5753 は西妻を南北中軸線に合わせ、南側柱筋は東西中軸線の北約 2 m という坪の中軸線をもとに地割りしたとも言える配置をとっている。

tab. 2 関連条坊座標一覧表

点	条坊道路	種別	X 座標	Y 座標	備考
1	二条大路	条坊計画線	-146,019.36	-18,586.21	朱雀門心（第16次調査）から70大尺南の点
2	壬生門	門心	-145,994.10	-18,318.60	第122次調査実測図
3	東一坊坊間路	西側溝心	-146,260.10	-18,328.04	奈良市昭和58年度調査概報
4	〃	東側溝心	-148,447.50	-18,296.46	〃
5	三条条間北小路	北側溝心	-146,148.63	-18,541.00	奈良市昭和61年度調査概報
6	〃	南側溝心	-146,155.41	-18,541.00	〃
7	〃	小路心	-146,152.02	-18,541.00	〃

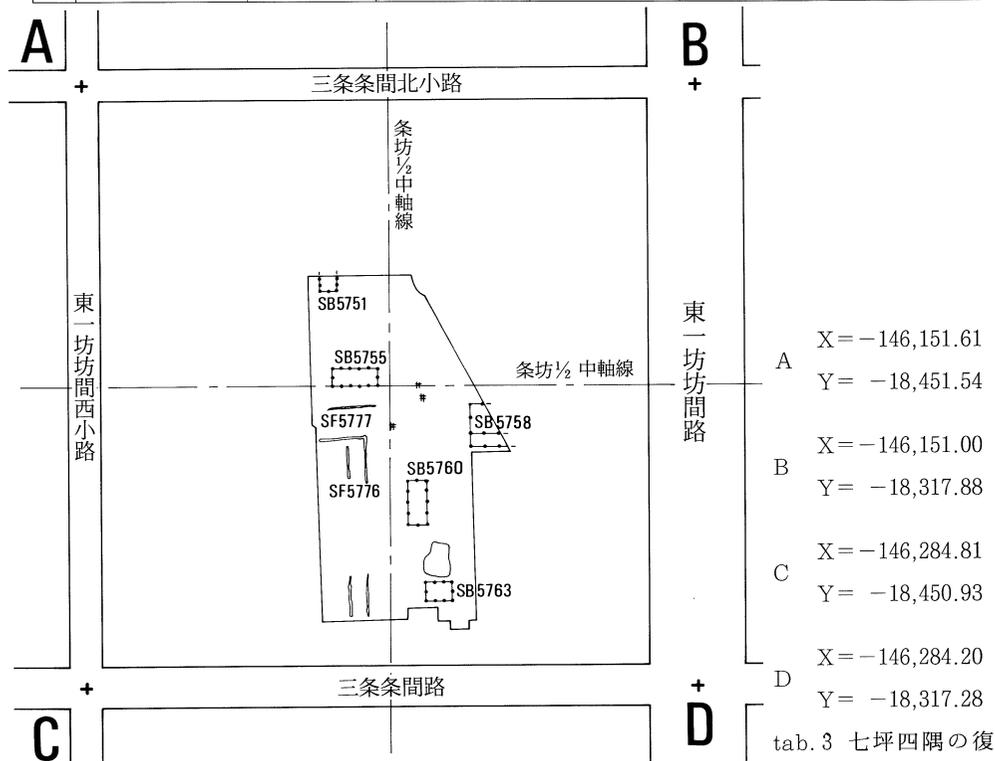


fig.32 七坪遺構配置図

A	X = -146,151.61
	Y = -18,451.54
B	X = -146,151.00
	Y = -18,317.88
C	X = -146,284.81
	Y = -18,450.93
D	X = -146,284.20
	Y = -18,317.28

tab. 3 七坪四隅の復

原条坊座標値